

一女性として歩んだ道

A Career as a Women

加藤信子 Nobuko KATO

あまり大きな声で言いたいことはありませんが、今年、還暦を迎えます。この機会に、越し方を一度、振り返ってみるのもよいかと思い、本稿をお引き受けしました。

私にとって化学の原点は、理科の実験でのリトマス色の变化にあります。まだ、「化学」という学問分野をはっきりと認識していたわけでもなく、また、どんな職業に結びつくかもわかっていませんでしたから、身近な存在である理科の先生になりたいと思っていました。理科への興味をさらに増幅させたのは子供向けのキュリー夫人伝です。ずっと後になって、大学の無機化学の授業で先生が「女性で化学を志す人はキュリー夫人のようにになりたいとすぐに言うが、とんでもないことだ。キュリー夫人の業績は、男性でも並大抵のことでは成し遂げられるものではない」とおっしゃり、その頃にはもうそう思う分別ができていましたが、最初に伝記を読んだときには、おこがましくもやはりキュリー夫人のようにになりたいと思ったものです。

ピアノを習っていたこともあって、音楽の道への憧れもありましたが、小学生のときに抱いた化学への興味はその後も続き、進路志望は化学でした。しかしながら、理系科目の中で私が好きなのは化学だけで、数学も物理も大嫌い、成績もどちらかといえば、文系のほうがよく、進路指導では、本当に理系に進むのかと念を押されたものですが、「好きこそもの上手なれ」といいます。第一人者になることは無理でも、自分の好きなことをやろうと、化学に進みました。公害問題が大きな社会問題で、学生運動のさなかという時代で、「公害の元凶を作り出すような分野に進むのか」と批判する友人もありましたが、おぼろげながらも、公害を克服できるのも化学の力しかないのではないかと感じていました。

私が学んだのは女子大学ですが、ここで多くの女性の先生方に出会えたことが、私の大きな宝です。昨今、

ロールモデルが身近にいないことが、女性の働く上でのハンディになっていると聞きますが、ごく自然な形で、人生の大先輩に出会えたことは本当に幸せだったと思います。

卒業後は、技術系女性を採用する企業が少ない中で、縁あってブリヂストンに就職しました。化学を職とすることができて大にはりきり、今思うと、かなり力も入っていたように思います。当時は、まだ男女均等というには程遠いところがありましたが、それでも、平等に向けた動きはその前の時代に比べれば進んでいて、優秀な女性にもチャンスを与えるべきだという言い方で、女性の働く場の拡大が叫ばれていました。しかしながら、私自身はこれにはちょっと疑問を感じていました。男性は優秀な人だけが働いているわけではないのだから、私のような普通の女性にも働く場を与えてほしいと思っていたのです。主任クラスへの昇進試験を受ける頃から、このような思いを強くし、普通の女性として歩む道ができればよいと思うようになりました。その後、多くの方に励まされ、助けられて、会社では初の女性管理職となり、分析以外の技術分野も担当するようになりました。予算、人事といった専門外の仕事も増え、学会活動など社外活動の場も増えてきました。専門一筋が好きという方もおられますが、私は望んだわけではないものの、生来の好奇心と楽天的な性格が幸いしたのか、化学から科学へと興味が広がり、さらには技術と社会の関わりへと考え方が広がってきたように思います。その原点は、進路を考えたときに感じた公害問題があるかもしれません。

こうして振り返ると、リトマスの色の变化に興味をもって以来、好きな道を歩むことができた幸せを改めて感じます。化学に大きな足跡を残すことはできませんでしたが、一人の子供が理科の面白さを感じ、好きな道を歩み、小さな志をもって生きてきたことが、少しでも次の時代につながればと願っています。



加藤信子 Nobuko KATO

株式会社ブリヂストン 中央研究所
首席フェロー（執行役員待遇）
日本女子大学家政学部 家政理学科一部卒業
専門は高分子分析
E-mail: katou-n@bridgestone.co.jp